

「伊勢物語」四段と九段の方法

藤 河 家 利 昭

はじめに

伊勢物語の四段と九段は、それぞれ二条后関係章段と東下り関係章段の典型として、この物語の特質がよく表われている。また言うまでもなく両段は原初の伊勢物語に存在していたとされる（九段については八橋の段と都鳥の段の二つが独立して存在したと言われる^{注1}）。ここではこの部分を対象にする。本稿では物語の文章と歌との対応関係を、古今和歌集の詞書と歌との関係と比較検討する。それによってこの物語の歌物語としての方法と創作の契機の一端を探ってみたい。

古今集と伊勢物語との比較については、成立論の立場から先後関係や影響関係など様々に論じられている。またそれに関連して現存伊勢物語では物語によって歌の性格が転化され、「昔、男」の人間像が形造られたと説かれている^{注2}。ここでは直接に成立の問題に触れることはないが、少くとも伊勢物語の歌の解釈は古今集のそれを前提にしていると思われる。また伊勢物語の異端的とも言うべき解釈

によって、男の人間像がどのように抽出されて来るかについて明らかにしたい。一方、古今集の詞書と伊勢物語の文章の相違については、文体論の立場から多くの論がある。そして業平の歌の発想と形式、伊勢物語の文章と表現における漢詩文の影響は種々指摘されているが、一段の構成は本事詩の説話構成から影響を受けたという^{注3}。歌を含めて一段の構成を漢詩風に仕立てていることも論じたい。

一

始めに四段について考察する。「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして」の歌は、伊勢物語においても「や」の助詞を疑問にとるか、反語にとるかで説が分かれている^{注4}。前者であれば、相手の女のいない今は、月も春も昔と変わったように見えるのに対して自分だけはもとのままであるというように、上句と下句の意味が対立的に捉えられる。また後者であれば、月も春も昔と変わりはなく自分ばかりが相手の女がいなくなってしまうというように、下句に余情を含むものと見て、上句か

ら下句への流れを一続きのものとして捉えるのである。ニュアンスの違いはあるものの、従来の説は基本的には右のように整理されよう。本来この歌の表現の特異性からして二様に取り得る余地があったとも言えようが、このような相違が生じた原因は、古今集と伊勢物語とがそれぞれ別の解釈をしていたということにもあるのではなからうか。両者の関係についてももっとこのことを明確にした上で論じられなければならないと思う。

そこで古今集の方から詞書と歌との関わりを見ていく。

(1) 五条のききいの宮のにしのたいにすみける人に、ほいにはあらでもいひわたりけるを、む月のとをかあまりになん、ほかへかくれにける。あり所はきくけれど、えものもいはで又のとしの春、むめの花さかりに、月のおもしろかりける夜、こそをこひて、かのにしのたいにいきて、月のかたぶくまで、あばらなるいたじきにふせりてよめる

在原なりひらの朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

(古今和歌集七四七番)

この詞書は言われるように古今集の詞書としては長く、しかも一文で言い切る形が多い中に二文になっている。しかし叙述の方法としては(1)が去年の事、(2)がその翌年の事で、一連の出来事として述べたものである。すなわち「む月のとをかあまりに」に対して「又のとしの春云々」という時節、また「にしのたい」という場所が一致している。それは「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ」と、現在の月や春と過去のそれらを思い比べるための条件設定である。そして翌年の同じ頃同じ所に出かけて行くのは、相手に物も言えず「こそをこひて、かのにしのたいにいきて」というのであるから、月も春

も昔と変わっていたようには考えられない。「月のかたぶくまで」

は月がいかにようにも昔と変わり得なかったことを示している。月や春はいなくなつた女を恋い惚ぶ拠り所以外ではない。一方「あばらなるいたじきにふせりて」は、周囲の情景として見れば去年と変わったようであるが、これは「ほかへかくれにける」と対応して、作者が一人取り残されたことを言っている。そうすると「我身ひとつはもとの身にして」もまた同様に、去年女がいなくなつたことを今年あらためてかみしめていることになるのである。従つて「我身ひとつ」に対して変わったものは相手の身の上であるとせざるを得ない。それは(1)の「ほいにはあらでもいひわたりけるを」に対する(2)の「あり所はきくけれど、えものもいはで」という情況の変化がもつぱら女の側の事情によることでも明らかであろう。この歌を恋の歌としてとる限り、また古今集時代の恋の歌の傾向として男女の關係がどのような情況にあるか、相互の位置關係を明らかにする必要があつて、それを歌自身が示し得ない以上、このような詞書によるほかはなかつたであらう。この詞書が特異な人間關係を暗示し、しかも過去から現在への事件の推移を具体的に述べていることは物語的であると言われる所以である。ただそれは通うのに困難な場所であること、またその期間を最小限一年としていることも考慮しなければならない。そして何よりもこの歌の振幅の大きさがそれを必要としたことであらう。伊勢物語の文章の味わいに比べる価値が劣るように言われるが、その意図はあくまで古今集時代の恋歌として読み得る条件を付与することであつたと思われる。さてこの詞書の規定するところでは、この歌は上句下句一貫したものとして、周囲の月や春をたどつた心情が結局自分に回歸し、女を失つ

た追懐の情を盛り上げていと捉えられよう。

このような古今集の解釈は、在中将集や雅平本業平集を見てもそれらがほぼ古今集の詞書を縮約したようなものであること^{注6}から、軌を一^{注7}にしていると言えよう。業平集では「そのありところはかはら^{注8}て」とあり、これは一年前と同じ所であることを強調するためであるが、「去年に似るべくもあらず」とする伊勢物語とは反対であつて、それとは違うことを示そうとしたのかも知れない。

二

これに対して伊勢物語は相異なる解釈をしている。

むかし、東の五条に大后の宮おはしましける、西の対に住む人有りけり。それ^Aを本意にはあらで心ざしふかゝりける人、行きとがらひけるを、む月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあざさりければ、猶憂しと思ひつゝなんありける。又の年のむ月に、むめの花ざかりに、去年を恋ひて行き、立ちて見、みて見見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身に

とよみて、夜のはのふくと明るるに、泣く／＼帰りにけり。

(伊勢物語四段)^{注9}

ここでは指摘されているとおり地の文に「去年に似るべくもあらず」とあることが決め手であつて、月も春も昔と変わってしまったのに自分だけがもとのままであるというように、上句と下句とを対

立的に捉えるのが妥当であろう。ただ「や」を疑問ととる説でも、上句を女のいない今変わる筈のない月も春も変わってしまったように見えるとするのはどうであろうか。「立ちて見、みて見見れど」と念の入った動作で周囲を確かめた以上、男の主観だけで月も春も変わってしまったように見えたというのは納得のいかないことで、やはり客観的にも様相を一変していたととるべきであろう。そうするとどうしてこの古今集にはない一句「去年に似るべくもあらず」という設定にしたのであろうか。これはもう一つの古今集との相違点、「心ざしふかゝりける人」という設定と深い関わりがある。このことは世間の掇をも情熱によつて越えてしまふ主人公の特質を提示したものと受け取られているが果してそれだけであろうか。殊にこれらの句が後の歌にどのように関わっていくかを考察したい。

そこで物語の展開を追って行くことにする。冒頭の「むかし、東の五条に大后の宮おはしましける、西の対に住む人有りけり」の文は、他の段の「むかし、おとこ有りけり」という書き出しに相当するものであるが、ここでは意表をついて相手の女を登場させ、しかもそれを二条の后のように暗示することによって、男にとって非常に困難な相手であることを示しているであろう。そしてそれは同時に物語の舞台を設定したのもあつて、この西の対をめぐって物語が展開すること、さらにはこの女の居た場所が最後まで重要な意味を持つことの予告である。ここ以外の場所で女との関わりを持ち、また女のいなくなったことを歎くことはないのである。

Aから実質的に物語が開始される。ここで二人はどのような関わりを持っていたのであろうか。「本意にはあらで」も諸説あるが、やはり端的に女との仲が望み通りに行かないことを言っていて、歌

の解釈でかつての逢瀬を懐しむようにとるのには従えない。それは次の文に「猶憂しと思ひつゝ」とあることに対応することからも言える。古今集では「え物もいはで」と対応する。そして三、四、五、六段の一連の二条の後関係章段の中に置いて、三段が懸想の歌を贈り、五段が忍んで通い、六段が盗み出す話であるから、四段は女の許を訪れる段階である。何よりも「本意にはあらで」をそのようにとってこそ「心ざしふかゝりける人」たる所以があろう。そういう状態ながら「心ざしふかゝりける人」が折節につけて高貴な女の許を訪れるさまは、あたかも源氏物語桐壺で「はかなき花紅葉につけても志を見え奉り、こよなう心よせ聞え給へれば」と語られる藤壺を一途に慕う若い光源氏のおうである。その相手が外に姿を隠してしまったことによって、最初から既にきわめて矛盾な情況が提示されたことになる。Bではそれを承けて、女の居場所は聞きながら訪れる方途を閉ざされた男の歎きが語られている。

Cではそれを転じて翌年のこととし、場面をかつてと同じ時節と場所に戻している。ところが「去年を恋ひて行き」という期待に反して男が見たものは、「去年に似るべくもあらず」という現実であった。つまり梅の花盛りに女に志を通わせた「去年」は既に現実のものとしては何もなく、ただ男の心の中にだけある。従ってDで「去年を思ひいでて」歌を詠む外はない。「月のかたぶくまでふせりて」はかつての女との逢瀬を暗示しているようであるが、そうではなく月以前の「むめの花ざかりに」と共に昔を思い起こさせるものとして、去年の「む月の十日ばかりのほどに」という女のいなくなった直前に関わりを持つことは言うまでもない。そしてさらに、「うち泣きて」が「泣くく」に続くように、歌を介して一夜のほのぼ

のと明くるに」に続けるためである。Dは結びとして、歌を中心に男の遣りよのない悲しみを語っている。先の「本意にはあらで」によって男の心情の揺れの大きさが際立つことになろう。このように見て来るとABC Dは起承転結の展開形式に従っているとさえ言う。

以上のことから四段は、「心ざしふかゝりける人」の行動と内面を事件展開に依じて交互に追求し、結局「我身ひとつはもとの身にして」の有りようを問うたものだと言える。すなわちこの男の「心ざし」は周囲のどのような変化にもかかわらず変わることはない。むしろ我身の外はすべてが変わった時にこそ、この男の独自の姿が浮かび上がって来るのである。古今集では「我身ひとつは云々の余情として女の身の上が変わってしまったという歎きを含んでいる。言いかえれば作者の心もまた失われた昔の事を恋い憶ふ懐旧の情に変わってしまったのである。ここでは「業平」の名を出すことによってかえって普遍性を目指している。伊勢物語は「去年に似るべくもあらず」によって懐旧の情を押し止めてしまっている。すなわち「我身ひとつはもとの身にして」という思いを最大限に拡大解釈したとき、「心ざしふかゝりける人」という設定にしたのであるし、またそうすることによって歌そのものの中にきわめて特異な物語の主人公の姿が語られることになった。このような歌の異端的とも言うべき解釈は、歌の中に叙事的なものをうち出そうとし、またより積極的に人間像を読み取ろうとするこの時代の傾向から生まれたものであろう。

次に九段も同様に古今集とは違う解釈をしている。先に古今集から見て行く。

あづまの方へ、ともとする人ひとりふたりいざなひていきけり。みかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるに、その河のほとりにかきつばた、いとおもしろくさけりけるをみて、木のかげにおりて、かきつばたといふいづもじをくのかしらにすへて、たびの心をよまんとてよめる

在原業平朝臣

唐衣きつゝなれにしつましあればはるばるきめるたびをしぞおもふ

(古今和歌集四一〇番)

この詞書も二文に分かれているが、(1)で歌の詠まれる背後の事情について、また(2)では歌の詠まれるに至った直接の事情について具体的に説明したもので、一体と見てよい。そして(1)はこの歌の詠まれた時が「あづまの方」への心細い旅を、続けている途中であることを示すことによつて、歌の内容に奥行きを付与している。また(2)は歌の内容そのものを規定し、この歌が、旅の途中で見たかきつばた(これは妻を偲はせるものであるが表に出していない)を機縁として「旅の心」を詠んだものとしているが、これはとりもなおさず上句から下句への流れと軌を一にするものである。従つてこの歌は東への旅に出て都恋しさの思いにとらわれていた作者が、偶々かきつばたを見て妻のことを思い出し、愈々望郷の念を強くしたというのである。言うまでもなく、羈旅の歌として下句の旅情に中心がある。

在中将集も雅平本業平集も基本的には違ひはない。業平集の場合、

「あづまのかたにすみところもとめむとてゆきしに」は伊勢物語によつたのであろうが、それが「よのなかつかしかしかりしろ」という限定のあることによつて自ずと違つている。

四

次に伊勢物語について考察する。

むかし、おとこありけり。そのおとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらず、あづまの方に住むべき国求めにて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の國、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたといとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にするへて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあればはるばるきめる旅をしぞ思ふ
とよめりければ、唐人、乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり。

(伊勢物語九段)

Aは自分の身を世に入れられないものとして、都を捨てることがから書き起こされている。これは言われるように東下りが二条の后との事と関わりを持つことを示しているであろう。また一方では物語語における新しい人間像の創造ということが説かれて以来多くの論がある。ここではもう少し歌との関わりを明確にしておきたい。先ず「身をえうなき物に思ひなして」は都における自分の存在理由を否定したものであつて、旅に出ようとする男の身の有りようを規定

している。そして「京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めにとて」は、京と東とが殆ど対極的にとらえられ、しかも京を捨てて東に住む国を求めるものであることよって、旅そのものの有りようを規定しているのである。Aの「行きけり」を承けて、Bでは以前からの友一人二人と共に、道を知っている者もなく迷いながら行ったことが、「いきけり」を重ねることで強調される。そしてここでも「もとより友とする人ひとりふたりして」が旅に出た男の身の有りようについて言っているのであり、「道知れる人もなく、まどひ」が旅そのものの有りようについて言っているのである。

Cではそれを転じて舞台は八橋に移るが、後で歌を詠むことになるかきつばたは、乾飯を食べた所に偶々咲いていたという具合である。ここで八橋の由来などをもっともらしく注釈しているのは、八橋がかきつばたの名所であることを晦ます言い方であるようにも思われる。ともかく古今集ではかきつばたを見るために態々馬から降りたのであって、物語がこういう書き方をしているところにも意図があるのであろう。さて「八橋といふ所に」、「八橋といひけるは」、「八橋といひける」と、くどいほど八橋が出て来るのは、二文を結びつけ、後の文の首尾を合わせるためであるが、また八橋を強調して京から遠ざかったことを言っていると思われる。そして「その沢の」、「その沢に」と、内容上は関係のない二文を場所によって結びつけ、僅かにかきつばたで妻のことを持ち出す伏線にしている。Dでも人から求められて歌を詠むのであり、その場の脚興という意味合いを古今集よりも一層強めている。こうして歌で初めて妻ということを出しているが、その「なれにしつましあれば」の

裏側には、「身をえうなき物に思ひなして」という事情がある。自分の身は存在価値のないものとしても、その身に馴れ親しんだ妻を思い捨てることが出来ないというのである。そして下句の遙々とやってくる旅の感慨もまた、その旅が京を捨てた、東に住むためであることから、つきつめられたところで葬せられたことになる。本来ここで「旅の心をよめ」というのは、Aの京には住むまいとした男の決心からすれば矛盾であって、その決心が固ければ「旅の心」など詠む必要はないのであるから、「なれにしつましあれば」という限定条件を設けた上で「旅」のことを思うというのである。これは京を捨ててもやはり京のことが忘れられないということではない。従ってここでは古今集のような鞍旅の歌としての作者自身に関わる旅情というものは排除されている。それを排除したところで、なお妻というものに関わりを持たざるを得ない男の、都から遠く隔たった旅の思いが追求されているのであって、そこにこの男のきわめて独自の姿が浮かび上がって来る。

五

⁽¹⁾むさしのくにと、しもつふさのくにとの中にある、すみだがはのほとりにいたりて、みやこのいとこひしうおぼえければ、しばし河のほとりにおりあて、思ひやればかきりなくとをくもきにける哉と思ひわびて、ながめをるに、わたしもり、はや舟にのれ、日くれぬといひければ、舟のりてわたらんとするに、みな人のわびしくて、京におもふ人なくしもあらず。さるおりに、しろきとりの、はしとあしとあかき、川のはとりにあそびけり。京にはみえぬとりなりければ、みな人みしらず。わたしもりに、これはなにどりぞととひければ、これ

なん宮ごどりとひけるをきよてよめる

名にしおはばいざ事とはむ宮ごどりわが思ふ人は有りやなしやと

(古今和歌集四十一番)

古今集では非常に長文で四文からなっているが、前半と後半の二つに分けられる。(1)以下の前半の文で、歌の背景となる出来事と作者の内面的な事情を、(2)以下の後半の文章で直接に歌の詠まれた契機を説明しているが、この二つは「さるおりに」で同時のこととして一つに結び合わされようとしている。(1)の作者の内面的な事情を説明した部分では二つのことをあげている。一つは「みやこのいとこひしうおぼえければ一以下の都から限りなく遠くに来てしまったという感慨と、もう一つは「わたしも、はや舟にのれ、日くれぬといひければ」以下の京に思う人がいないわけでもないという事情である。ただ後者は「みな人」の事情であって、そこにこの歌を作者個人が思う人への感情を表現したものととられるのを避けようとする意図があると見てよいであろう。また「京におもふ人なくしもあらざ」も抑制した表現である。そして先の二つのことは「思ひわびて」、「ものわびしくて」という語句の共通性もあるように、一連のものとして述べられているが、どちらかと言えば前者の旅の感慨を主、後者の思う人を従とする言い方である。旅の思いの中で思う人のことも偲ばれるというわけである。古今集でもこの歌が旅の歌のようでも恋の歌のようでもあることからこのような長い詞書が必要になったと思われる。(2)以下の都鳥の説明も、それが直接に歌に関わるものであることから、見知らぬ鳥が都鳥の名を持つために都恋しさをひきおこされたことがこの歌の中心であることを示している。ともかく「みやこのいとこひしうおぼえければ」は伊勢物語に

なく、これが旅の歌であることをはっきり示している。在中納集も業平集もほぼ同趣旨である。

六

A 猶行きく^Aて、武蔵の国と下つ総の国との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。B その河のほとりにむれるて、思ひやれば限りなくとをくも来^Bにけるかなとわびあへるに、渡守、「はや舟に乘れ、日も暮れぬ」といふに、乘りて渡らんとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにもあらず。C くるおりにしも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鴨の大ききなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。D 京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなん宮ごどり」といふをきよて、

名にしおはばいざ事とはむ宮ご鳥わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こそりて泣きにけり。

(伊勢物語九段)

伊勢物語では、Aのこれを渡れば一段と都を遠ざかってしまふ角田川に至ったことを承けて、Bは限りなく遠くにやって来た旅に思いをはせ、それを振り切って舟に乗って渡ろうとするが、結局京に残して来た人のことに思いが帰着するという経緯を語っている。すなわち旅の思いは振り切るにしても京に思う人とのつながりは断ち切れないというのである。そしてここでは「わびあへるに」と、旅の歎きは皆で分かち合えるが、「皆人物わびしくて」と、思う人のことは歌でしか共感し得ないという文脈になっている。従ってそれは「京に思ふ人なきにしもあらず」と、感情を抑えた表現になっている。またこの表現はこの段の初めで示された「京にはあらず云々」

という男の決心とも関わりを持つのであろう。Cでは「水の上に」とすることが、古今集で「川のほとりに」とするのに対して、既に川を渡りつつあることを示している。また「京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず」は、Aの「それをすみだ河といふ」に対して、この川の中途が所謂旅の思いからは抜け出た場所であることを示しているのではなからうか。このCはAと相対して中心となるBを補助する形にもなっている。以上のことからDで詠まれる都鳥の歌は、旅の思いを越えた位置に立つものであることによって、思う人の安否を問う男の心情をよりつきつめたものになっている。ここでも旅情を押えて、下句の「わが思ふ人はありやなしや」という原質的な男女の関わりの方が前面に押し出されているのである。

結 び

このように伊勢物語は、地の文と歌との特異な関わりによって歌の中に男の独自の心情の有りようを追求しているが、それは業平の歌に対する個々の解釈に基いている。例えば「我身ひとつはもとの身にして」という下句を、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」という上句を受けるものとするので、むしろ上句に対立するものとするのである。そうしてゐることは、何よりも物語の文章が、A「行かばなむひびくを」「ほかにかくれにけり」「B」ありどころは聞けど」「猶憂しと思ひつゝなんありける」「C」立ちて見、あて見見れど」「去年に似るべくもあらず」と、男の心情と周囲の情況とを終始対立的に捉えて来たことが示している。また「唐衣きつゝなれにしつましあれば」という上句を、「はるく／＼きぬる旅を

しぞ思ふ」という下句に従属するものとするので、むしろ対等の比重を持って並立するものとなっている。それはAからCまで自分の身に關することと旅に關することとを並列して述べて来たことと分かる。さらに「わが思ふ人はありやなしや」という下句を、「名にし負はばいざこと問はむ都鳥」という上句に従属するものとするので、むしろ下句に比重を持たせようとしている。それはAからCの旅の思いを振り切りながら思う人にとらわれていくという展開に規制されてくるからである。

こういうことが可能になったのは、業平の歌が上句と下句とを分離し得るような構成であること、またそうしてもそれが業平らしい格の大きさや情感の深さを持っていること、さらに「唐衣」の歌のように上句と下句の内容と形式自体が並立的になっていること、しかも通常の論理を逆転させたような論理で続いていることなどの特色を持つためであろう。このような歌の扱い方は先述した物語の展開形式（起承転結）と結びつく。すなわち歌の上句と下句をそれぞれ漢詩の一句のようにとらえ、それを物語の最後にすえて全体を漢詩風に展開していくこととするのである。こういうところに伊勢物語創作の契機的一端があったように思われる。それは漢詩文の盛んな当時の好尚に合うものであったろうし、またその形式は一組の男女関係の推移を語っていくのにも好都合であったろう。

注1 片桐洋一氏著「伊勢物語の研究」研究篇「二八六頁

2 室伏信助氏「伊勢物語の歌の性格」古今集所収業平歌を含む段をめぐって

て」(中古文学第二号昭和四十三年三月)

3 山岸徳平博士著「物語隨筆文学研究 山岸徳平著作集Ⅲ」五三頁

- 4 徳田政信氏「伊勢物語『月やあらぬ』考(上)―宣長の反語説は成立するか―」(中京大学文学部紀要第八卷二号昭和四十八年十一月)に詳しく整理されている。
- 5 日本古典文学大系による。(1)(2)を私に付す。以下同じ。
- 6 片桐氏は、在中将集は古今集を優先的に資料にし、雅平本業平集は虚構化された伊勢物語によったと言われる。前掲書一一二・一四四頁。
- 7 私家集大成による。以下同じ。全文を掲げるのは省略する。
- 8 日本古典文学大系による。ABC Dを私に付す。以下同じ。
- 9 窪田空穂著「伊勢物語評釈」三八頁。
- 10 唐木順三氏著「無用者の系譜」一六頁。
- 11 清水好子氏は、業平の歌に漢詩文風な言い廻しである否定辞と対句的な繰返しという技巧が多いと指摘されている(「物語の文体」国語国文昭和二十四年九月)。また片桐氏は対句的な表現の外に倒置法的表現をあげられている(前掲書二六八頁)。